World View アジア発

シリーズ「アジアほっつき歩る記」第29回

台湾　もう一度台湾を見直すべき

須賀（すが）　努（つとむ）
コラムニスト・アジアンウオッチャー

親日的で日本人には居心地が良い島、台湾。反日、空気汚染などで中国大陸への旅行を控えるようになった日本人は、台湾で多く見られる存在だが、実はそれを遥かに上回る観光客を送り込んでいるのが中国。微妙な中台問題、日台関係などについて現状を報告したい。

日本を懐かしむ台湾

今回は那覇から台北に入った。LCC ピーチ航空に初めて乗ったが、乗客の半数以上は台湾人だった。因みに帰りの台北－成田の LCC バニラ航空も同じ。日本人が台湾に沢山行っていると書いたが、実は台湾人が格安航空を利用して、それ以上にどんどん日本に来ているとも言える。

台湾では数年前から『旧懐、日本ブーム』といった日本統治時代を懐かしむ、日本は台湾に良いことをした、という話題がたくさん紹介され始めた。筆者の興味のある分野で言えば、日本は台湾に外貨獲得のために紅茶を植えたのだが、その紅茶が今ブームになっている。そして『台湾紅茶の守護者』として、茶業試験場の所長だった新井耕吉郎という日本人の名が急に浮上しているが、日本人では茶業関係者でも彼の名を知っている人は殆どいなかった。

写真１　台北に残る日本家屋

この現象は『日本語世代の旧懐』という側面がある。李登輝元総統に象徴される、日本語教育を受けた、現在も日本語を話し、日本を懐かしんでくれる世代は、既に70歳代後半から80代以上となり、鬼籍に入った人も少なくない。この世代はある意味で強力な日本のサポーターであり、『中国大陸からのプレッシャー』へのアレルギーは凄い。このため、自らのノスタルジーも含めて日本統治時代を懐かしんでいるのではないか。そこへ若者たちも加わり、一大ブームとなっている。

中国からのプレッシャー

中国政府の最重要課題の一つは間違いなく中台統一。この課題解決のためなら、多くの犠牲を払うことだろう。以前は台湾企業の大陸投資を優遇するなど本土での活動が多かったが、特に馬英九政権誕生以降、台湾への中国人旅行者解禁など、実弾を撃ち始めている。既に台湾に来る中国人は年間300万人以上、台北には上海など中国各地から直行便が飛来し、観光客は相当の土産物を買い込む。阿里山高山茶などはどう見ても茶葉が足りないほどで、これは効果を発揮し台湾内を潤している。

台湾一の名所、故宮博物院へ行くと、朝から大勢の中国人観光客が列をなし階段までビッシリ占拠している。正直ゆっくりと素晴らしい工芸品を鑑賞するという雰囲気はまるでなく、台湾人も眉を顰めながら『故宮には絶対行かない』などという拒否反応を示す人が多い。

また台湾への投資も水面下で活発になっている。

撮影：佐渡多真子

【須賀努氏のプロフィール】
東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾２年、香港通算９年、北京同５年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

大陸に進出した台湾企業を「台商」というが、この台商が大陸で儲けた資金を使い、台湾の不動産や株式を買い漁っている。中には中国の資金がこの形態で還流しているケースもあり、最近台北とその近郊の不動産の値上がりは異常で、北京や上海同様、一般庶民には全く手が出せない水準にまでなっている。因みにその影響もあり、台湾人が東京などで不動産を買うケースも増えている。円安もあり、彼らには特に割安に見えるようだ。

写真２　故宮博物院の中国人観光客

『馬政権の大陸寄りの政策は将来の台湾を脅かす』と危惧した台湾の大学生たちが立法院（日本の国会）を占拠する事件も発生している。経済的に見れば中国と組んでいくメリットは大きく、若者の就職先として大陸は重要ではあるが、それでも目先にとらわれずに堂々と反対を表明した学生に台湾人も称賛を隠さない。

日本が真に組むべき相手は

台湾人は『国際的な認知度が低い』『政府には頼れない』などの理由から、個々が自立して、国際社会で道を切り開いてきたが、ここに来て、その動きが止まったかのように見える。以前は個人企業のオーナーが自らの才覚で大陸へ進出し、大陸のコストが上がるとベトナム、カンボジアなどへ範囲を広げ、一時は台湾企業の行く所が次の「世界の工場」になると思えた時期もあったが、最近はあまり目立った開拓拠点がない、ようにも思える。

商品開発力には劣るが、商品を素早く低コストで作る力は抜群で、電子部品やスポーツシューズなどの世界では、台湾企業抜きには生産は考えられない状況を生み出し、その強みを発揮している。だがこちらも中国の景気減速などの影響で、商品の売れ行きが落ちると、下請け的な仕事の受注は必然的に減少していき、台湾企業は曲がり角に来ているようだ。

台湾で聞く話として『こんな時だから、日本企業ともっとタイアップして事業を進めるべきだ』という声が多くあった。『日本企業には新商品の開発力がある。中国にはそれがない。日本の技術、台湾のスピード、そして市場としての中国及びアジア。これで乗り切る』と語る企業経営者もいた。

世界最大のEMSメーカー、鴻海科技集団は昨年新商品開発の為に日本で日本人技術者チームを立ち上げたが、これなどはまさに今後の日台協力の一つの形だろう。日本の大手企業で生かされない技術者と共に新商品を開発する、従来の『技術を盗む』発想とは違っている。そして高い技術力を有するが日本企業から発注が来ない、日本の中小企業とのパイプを作り、一体となって商品開発を進めるために、鴻海は資金を提供し、場を与えようとしている。

勿論親日的だからと言って台湾企業はそう甘くはない。日本のカルチャーが入り込んではいるが、経営者の頭はアメリカ式であるケースも多い。その辺の見極めをきちんとつけた上で、台湾と付き合っていく、これは日台双方に取り、重要な選択ではないか、と思うのだが、如何であろうか？